



聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

わたしの足など、決して洗わないでください

私が出会った先生・教授の中で、嫌いだった先生はカナダ人の倫理神学の教授でした。理由ははっきりしています。重箱の隅をつつくような問題を出すからです。勉強する側からすれば、学んだことの中核部分がおそらく問題に出るだろうと網を張って準備をします。しかし教授は私たちが予想しなかった部分、絶対に問うはずのない部分を問うてきました。

本人の答弁はこうです。「神様の学問に、これは重要である、これは重要でないなどという違いはありません。すべて重要です。」言いたいことはわかります。教授の試験問題をイチゴに例えると、「イチゴは先端部分と根元の部分、どちらが甘いでしょうか」これは誰もが想定するわけですが、教授は「イチゴのヘタは、何枚あるでしょうか」というような問題を出してきたのです。「そんなこと知るか」と私たちは問題を見て教授を恨めしく思っていました。

ペトロは、イエスが弟子たちの足を洗う中、イエスに言いました。「わたしの足など、決して洗わないでください。」(13・8) 弟子と師の間で、足を洗ってもらうなど、絶対に受け入れられなかったのです。絶対に起こるはずのないことが目の前で繰り広げられている。弟子と師の関係で中心部分になり得ないことを、イエスは中心部分として取り上げている。学生当時の倫理神学の教授のことを思い出したのです。

ただ、イエスがなされたことは、イエスにとってはちゃんと説明が付きまします。「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」(13・7) 確かに理解できない行動です。しかし、「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」(13・14-15)

師匠が弟子に対して膝をつくことはしませんが、師匠の殻を破れば、可能かもしれません。先日司祭叙階式が行われ、ミサの終わりに新司祭はご家族に祝福を与えましたが、それに続いて中村大司教様も、「新司祭の祝福を、しもべであるわたし、大司教にも与えてください」とおっしゃって、新司祭の前に膝をついたのです。

そこには、名誉大司教もいました。17年間司教職を務めた名誉大司教は、記憶する限りそんなことは決してなさいませんでした。司祭団が教区の内外から100人ほど来ていました。他の司祭はどう思ったかわかりませんが、中村大司教が新司祭の前に膝をつく様子は、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」どころか、未だに分かりません。私に力が足りず、分かろうとしないから、分からないのかもしれませんが。

ただ、「後で、分かるようになる」その時が来ることを信じたいと

思います。今年の聖木曜日も、洗足式を行います。中田神父は信徒の足を洗うことを「努力」とも「謙遜さの表現」とも思っていない。「儀式」だと思っています。その昔、洗足式のメンバーの中に、私にとって腹立たしい人が混じっている洗足式がありました。いつも意見が対立する人でした。それでも、努力してその人の足を洗ったわけではなく、儀式と思っていたので何ともありませんでした。

きっと、中田神父は「儀式」という縛りの中で洗足式をしているのだと思います。そんな私にイエスは今、大声で言いたいでしょう。「ラザロ、出てきなさい。」「儀式として割り切って足を洗ううちは、わたしのしていることは、今あなたには分かるまい」そうおっしゃっていることでしょうか。私も、何かの縛りに置かれていて、殻が破れないままでいる。殻を破らない限り、イエス様のしていること、中村大司教様のしていることが、理解できないのでしょうか。せめて中村大司教様が引退されるまでに、大司教様の思いを汲み取れる司祭になりたいと思います。

今年も、洗足式が控えています。私は今この時点でも、何かの縛り、何かの殻を打ち破れていません。それが何なのか、今晚だけでなく、復活祭のその日まで考え、思い巡らしてみたいです。それが何なのか理解できたとき、同じ動作をしてもイエス様の深い思いが宿り、「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（13・1）あの境地に近づけるかもしれません。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)